

学び合い、生き生きと活動する児童の育成

— 伝え合う力を育てるための指導の工夫 —

I 研究の内容

(1) 研究仮説

国語科において伝え合う力を育てるための指導の工夫について探り、授業実践に生かしていくことによって、学び合い生き生きと活動する児童が育まれるであろう。

(2) 研究の方向性

今年度は、昨年度研究の方向性を継承しつつ、更に研究内容を焦点化して主題に迫りたいと考え、「書くこと」の領域で研究を進めていくことにした。「書くこと」は、自分の今持っている言葉を介して繰り返し考えることである。何をどのように書いたらよいかを分析し、その中から言葉を選び順序を決めて書く。書いたものを巡って話し合い、助言し合い、修正を加える。この一連の学習は、ともすれば子どもたちに忍耐を強いる場も出てくる。そこで、書くことの基本に立ち返ることが大切である。伝えたい事柄があるから書くのであり、伝えたい人がいるから書くのである。子どものこの思いに十分応えられ、かつ学年の指導事項を確実に実現できる教材・指導の工夫を研究することによって、子どもたちに生き生きと活動できる場と力を保証していきたいと考えた。

(3) 研究の具体的内容

- ◇ 「書くこと」の理論研究・学習会
- ◇ 学習指導要領「書くこと」の領域の低・中・高の系統性を理解する
- ◇ 教科書教材の中で書くことがどのように扱われているのか分析する
- ◇ 「書くこと」年間時数の確認
- ◇ 「書くこと」の年間指導計画作成（授業をしながら書き込み修正していく）
- ◇ 実態調査（子どもの状況を把握して指導に生かす）
- ◇ 個人カルテの観点を洗い出す
- ◇ 授業研究の視点の検討
- ◇ 共同指導案作り
- ◇ 研究授業
- ◇ 一人一実践
- ◇ 「生活習慣病予防等を目指した歯・口の健康づくり調査研究事業」のまとめ

II 成果と課題

【成果】

「書くこと」に対して苦手意識を持つ子どもが少なくなった。また、限られた時間の中で自分の言葉で文章を書くことができるようになってきている。教師自身が「書くこと」の価値について再認識し、より意識的に授業実践を行ったり、言語環境に気を配った成果が大きいと思われる。

- ・国語科の授業の中で、指導と評価の一体化を図るために、3つの観点を意識して授業を行った。

①評価規準を明確にする。

- ・一単位時間に一領域一指導事項に絞る。
- ・評価基準作成に当たっては、どこに焦点を当てて子供の記述内容や発言内容を分析すればよいか明確にする。

②ねらい達成のための具体的な手だてを講じる。

(例) 有効なワークシートや学習教材の活用

③自己評価・相互評価を取り入れる。

評価の観点を明確にし、子どもが意識できるようにする。

- ・小さなステップをおったスキル学習を取り入れた。
- ・子どもの意欲に直結する目的意識・相手意識が高まる手だてを工夫した。
- ・日常の生活の中で、共感的理解のもとに、短文で綴る活動を継続した。

・文科省より委嘱を受けた研究の2年目にあたり、多数の保護者の参加のもとに研究発表会をもった。子ども自身がよりよい生活習慣とはいかなるものかを知識として知り、それを身につけるための具体的方法を体得したことが大きな成果である。子どもの変容は、親・家庭への啓発にも直結した。「歯と口」の研究を切口に、学校と家庭の連携をより深めることができた。

【課題】

- ・「書くこと」の素地づくりを国語科の中だけではなく、あらゆる機会を利用して進めていく必要がある。読書に親しむ習慣を大切にしながら、様々な文章にふれ、その成果を書くことに波及させていきたい。
- ・「書くこと」「話すこと」「読むこと」各領域をより有効に関連させ指導効果を上げる事を模索したい。目的意識・相手意識の高まりが期待される。

III 成果物

- ・研究授業指導案3学年

「まとまりに分けて書こう」 光村図書 あおぞら下
せつめい書を作ろう

(研究主任 渡邊 祥子)